SUAC 図書館の将来の可能性に向けての提言

Feasibility Study for Next stage of the Library of SUAC

花澤信太郎
デザイン学部空間造形学科
Shintaro HANAZAWA
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

林　左和子
文化政策学部文化政策学科
Sawako HAYASHI
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

的場ひろし
デザイン学部メディア造形学科
Hiroshi MATOBA
Department of Art and Science, Faculty of Design

和田　和美
デザイン学部メディア造形学科
Kazumi WADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

SUACの図書館は毎年の受入れ状況から換算するとあと数年で書架が飽和状態となることが予想される。一方で、全国の大学図書館に目を転じた場合、サービス面や空間的なデザインの側面からさまざまな工夫をこらし、学生の学習環境の向上を果たすことによって、ひいては大学自体の魅力として受験生や地域社会へのPR効果をもたらしている事例がみられる。そこで本研究では、本学図書館の蔵書スペースの問題や大学図書館としての特色のあり方について考察し、その可能性を提言する。

Possible solutions are sought on the issues the library of SUAC is faced with. One is how to deal with the problem of increasing books every year. The other is what kind of features can be added to distinguish the SUAC's library from other libraries.

1．はじめに

1-1．大学図書館をめぐる現状

今日の急速なIT技術の発達を受けて、大学生の自主的な知識の習得はコンピュータを介してweb上からなされる場面が増えている。確かに最新の情報をリアルタイムで入手するという点でwebサイトの閲覧は圧倒的に有利な手段であるが、書籍には有史以来の人類の知恵が蓄積されている点や、装丁や本文のレイアウト自体にデザイン的な価値が認められるものがあることなど、これからも学生がそこから学ぶべきものがあるといえる。

また、金沢工業大学ライブラリーセンターや成蹊大学情報図書館などのように、図書館にシステム的、空間的な付加価値を加えることにより、学生の学習環境の向上が図られ、結果的に大学自体のPRにも貢献していると考えられる事例も見受けられる。

1-2．SUAC 図書館の現状分析

平成12年の開学と同時に運用を開始した本学の図書館・情報センターにおいては、ゆとりのある天井高さや広いキャレルのスペースなど、基本的な空間としては良好な状況が用意されていると考えられる。

しかし、本学図書館における現状と将来への展望を試みた場合、増え続ける蔵書への対応の問題の一方で、将来的には予算削減の可能性のあることも考慮しつつ、図書館としての独自性をどのように打ち出すかという課題に直面しているのが現状である。例えば、本学の図書館の設計時点における蔵書の収蔵量は30万冊であり、現時点では約18万冊が収蔵されている。これに毎年1万冊の蔵書が受入れられているために、計算上ではあと10年で現状の図書館の収蔵量は飽和状態を迎えることになる。書架が満杯の状況では事実上図書の管理は不可能となるため、早急にこの問題に対して何らかの対応策を検討することが求められている。

1-3．研究の方針

そこで本研究では、IT技術社会においてなお、書籍を有効活用し得る図書館の未来予想図を念頭におきながら、本学図書館の蔵書スペースの横溢化の問題の解決策と、大学図書館としての特色の打ち出し方の可能性について検討を進めることとした。

2．蔵書スペースの横溢化に関する検討

2-1．本学図書館における収蔵スペース

現状分析の項目で触れた様に、本学の図書

館では早急に蔵書スペースの問題に対策を立てる必要があるが、現在の図書館のエリア内では大幅に書架を増設するのは難しい状況となっている。

2-2．図書館における蔵書の分類

ここで、本学図書館における蔵書の種類について考えると、大きく次のように分類することができる。

a. 新刊書を含む一般の書籍
b. 雑誌などの定期刊行物

この内で、b. の雑誌などの定期刊行物については、本学図書館においても各学科に関連した書籍が購入されており、それらは一定期間を経た後に、合本して図書館１階の集密書架のスペースに相当量が収蔵されているが、そのような合本については、例えば空間造形学科の教員や学生が主に利用する「新建築」誌のように学科の内容に密接に関係しており、なおかつ他の学科からの閲覧の頻度が少ないと考えられるものが存在する（写真１）。

写真１
本学図書館集密書架の合本の収納状況

2-3．IC タグを利用した書籍の管理

一方、図書の管理システムに目を転じると、それらはIT技術の進歩やICタグの登場により近年大幅な進展が見られている。IC タグとは、小型の無線チップであり、これを利用することにより従来のバーコードのように接触することなく個体を識別することが可能になる。IC タグによる図書管理の技術は浜松市立図書館などの公立図書館においても既に導入される事例が見られ、書籍の貸出し作業の自動化などに貢献している。

2-4．書籍の検索システムの動向

この種の技術として実際に稼動しているものとしては、丸善東京本店で提供されているサービスがある。これは、書籍を検索した際に目的とする本がどのフロアのどの棚に存在するかを表示してプリントアウトするサービスである。ただしこの場合には本の分類場所を基準に情報を提供するために、結果として表示される書棚には実際に多数の書籍が存在して、そこから目的とする書籍を探し当てることが難しい状況も見られる。

一方で、近年の技術開発では、１冊ごとに貼り付けられたICタグを、書棚に埋め込まれたアンテナで読み取ることによって、書棚に何冊の本が配架されているか、また書棚の何段目に探している書籍が配架されているか、などについても検索が可能になっている。実際に特定の位置まで書籍を表示するサービスは、2007 年に府中市立中央図書館においてスタートし、有効に機能している。

2-5．新しい書架の提案

このように、図書の検索に関しては、目的とする書籍の所在を知らせるにあたって、表示された場所の範囲が広いと、どこにあるかを特定することが難しくなるという欠点がみられるが、IC タグの技術を利用すれば、より詳細に書棚の中における書籍の位置を特定したり、１冊ごとの貸出し状況を自動的に記録することが可能になると考えられる。写真２の左側に映っているのがICタグのリーダ・ライタで、上に映っているのがアンテナである。リーダ・ライタをコンピュータに接続することにより、本に貼り付けてあるICタグの情報を読み取ることが可能になる（写真３）。

そこで、本研究では書籍の保管と整理に関して、図書の検索機能もかねた棚を考案して、その部分的な試作を開始している。写真４は試作棚についての検討模型であるが、この書棚では棚のユニットの間にあるスリットの部分にLED（発光ダイオード）を設置し、目的

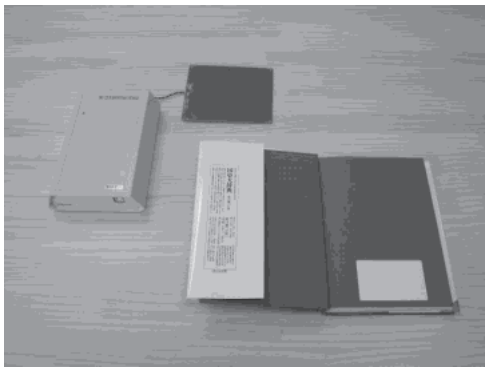

写真２
IC タグおよびリーダ・ライタとアンテナ

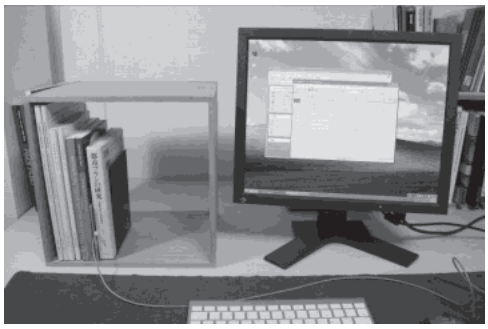

写真３
IC タグの読取りテスト

写真４
試作書架の検討模型

とする書籍のありかを細かくユニット化した範囲で表示するため、書籍の位置の特定が容易になるというメリットが考えられる。さらに、書架のユニットについて、それぞれに透明の扉を取り付けて、ソレノイドのような電気的な信号に反応する装置と組み合わせることで、利用者が目指す本を検索し、自らロックされた扉を開けて書籍を抜き取ると、その情報を書架が読み取って記録するシステムを作ることが可能になると考えられる。

2-6．図書資料の遍在化の可能性

以上のようなシステムを使用することによって、各分野に密接に関連した定期刊行物などの合本されたバックナンバーについては、大学内の適切な位置に分散配置することが可能になる。そしてこのような方式をとることによって、現在の図書館書架に空きスペースを確保することが可能になると考えられる。また、分散配置の場所によっては、学生や教員にとって自らの専門分野の書籍がより手軽に閲覧できるというメリットが得られることになる。

一方でこの方式の場合には、全体としての書籍の管理をどのようにするか、また分散配置の適切な場所をどのように選定するか、という検討点が想定され、具体化にあたっては今後これらについての検討が必要となる。

3．大学図書館の特色のありかたの検討

3-1．展示会活動の意義と目的

(1)大学図書館の展示会

図書館空間を魅力的な場所とすることを考えた時に、所蔵資料を「見せる」方法が考えられる。近年積極的に展示会活動を行う大学図書館が増えてきている[i]。テーマをもうけて所蔵資料を「見せる」ことで、利用者の興味をかきたてることをねらいとしている。

展示会で、図書館がどのような資料を所蔵しているか(期待できるか)を知ってもらうことも利用につながると考えられる。例えば蔵書検索を行う場合、最初の検索で見つからなかった場合でも、所蔵しているであろうとの期待感があれば、他のキーワードを使うなどして再度検索してみるであろう。

大学の地域貢献の一環として大学図書館の地域への開放が進む中で、展示会は学内だけでなく学外者の利用を促進する機会にもなると考えられる。

(2)バリアフリー絵本展の目的

バリアフリー絵本とは、障害のある子ども

とない子どもが一緒に楽しめるように工夫された絵本や、障害のある子どもが登場する絵本などである。たとえば、布など様々な素材を使って情景を再現したり、感触の違いを楽しむことができる「布の絵本」がある。市販絵本の絵の部分に透明のシートを貼り、同じ透明シートで点訳も貼り付けたのが「点訳絵本」である。手話がつけられた「手話絵本」、機器を使って読むDAISYやマルチメディアDAISY版図書もある。DAISYは、読みたい箇所にすぐ移動できる、収容容量が高いといったデジタルの特徴を生かした、デジタル録音図書の規格として開発された。最近では、音声とテキストと画像がひとつとなったマルチメディアDAISYが開発されてきている。マルチメディアDAISYはディスレクシアなど読みの障害をもつ人にも理解しやすい資料である。

こういったバリアフリー絵本の紹介を主とした展示会を企画した理由は３点ある。第一に、本学図書館にユニバーサルデザイン関連する蔵書は相当数あるが、NDC(日本十進分類法)を活用した配架方法では一カ所にまとめられていない。このため、関連する内容であっても、見過ごされてしまうことがある。資料の一部を展示しさらにその他の関連する資料のリストを作成･配布することで、関心をもってもらうことができるのではないかと考えた。第二に、バリアフリー絵本の存在はまだ十分に知られているとはいえない。これまでボランティアによる手づくり絵本がほとんどであったが、最近少しずつではあるが市販されるものが増えてきた。しかしこのような資料を大学図書館が所蔵していると期待されていないと思われる。存在を知らないもの、所蔵していることを期待していないものを検索しようとはしないであろう。展示会を開催することで、資料の存在自体と本学図書館がこういった資料を蔵していることを知ってもらうことができると考えた。

第三に「IBBY障害児図書資料センター」の推薦絵本を借りることができた。このセンターでは、世界中で制作されたバリアフリー絵本を収集し、隔年で推薦図書を選定している。選定された図書はIBBYの各国支部を通して、展示会のために貸し出されている。おりよく2005年度に選定された40点が日本に来ており、借りることができた。その中には、イランの様々な感触の材料を使ってつくられた「さわる絵本」や、日本のボランティア団体が作成した「においのする絵本」なども含まれている。このような普段目にする機会が少ない多様なバリアフリー絵本は、会場に足を運んでもらうきっかけとなる。こういった絵本への関心を本学所蔵資料に結びつけることができるのではないかと考えた。

浜松市との共催事業として、浜松市立城北図書館の一室を会場とした。大学外で行うことで、日頃大学に来たことのない人に興味を持ってもらうことができる。またこの図書館はユニバーサルデザインを配慮した建物であり、1Fには大活字本コーナーや拡大読書器、対面朗読室そして点字図書・録音図書の貸出をおこなう「声のライブラリー」コーナーが設けてある。こういったコーナーの関係者に興味をもってもらうことができるであろうとも考えた。

3-2. バリアフリー絵本展の実践について

(1) 開催期間・場所

日時：平成20(2008)年３月８日～３月23日　(月曜日を除く)

10:00～17:00(最終日のみ13:00まで)

会場：浜松市立城北図書館2F会議室

主催：世界のバリアフリー絵本展開催実行委員会

共催：静岡文化芸術大学、浜松市

(2) 展示内容

① コーナーの設置

・「IBBY障害児図書資料センター」が推薦する2005年の40冊（写真５）

・市販されているバリアフリー絵本及びDAISY図書(大学図書館所蔵及び教員個人所蔵)（写真６）

・日本国内でバリアフリー絵本提供サービスを行っている機関・団体の紹介

・本学紹介

　ユニバーサルデザイン授業紹介

　大学図書館

　本学学生の手作り絵本

② 配布物

・「展示資料目録」
・「さらに詳しく知りたい時に」(大学図書館所蔵の関連資料や関連する機関や団体のサイトなどの紹介)

写真５
「IBBY 障害児図書資料センター」が
推薦する 2005 年の 40 冊

写真６
市販されているバリアフリー絵本
及び DAISY

(3) 学生スタッフ
学生スタッフが常時会場に待機し、来場者への展示内容の説明及びアンケートの依頼をおこなった。さらに時間の許す範囲で、来場者の様子などの記録も担当した。

(4) 来場者数　　838 人

(5) アンケート結果から

表１　種類別認知度

	見たことがある	聞いたことがある	はじめて知った
布の絵本	108	37	47
点訳絵本	92	74	28
手話付き絵本	16	29	147
拡大写本	59	37	84
DAISY(マルチメディア DAISY)	22	31	139

表１は、来場者がこれまでにどの程度バリアフリー絵本について知っていたかについてたずねた結果である。布の絵本や点訳絵本は知っていたと答えた人が多い。一方で手話付き絵本や DAISY(マルチメディア DAISY)の存在を知っていた人は少ない。

(6) アンケート結果(自由記述)
・文芸大がこのような活動をしていることを知らなかったので、もっと図書館と連携して幅広い活動をしてもらえると一市民としてたのしみです。
・こんな絵本展があってよかった！もっとおおぜいの人たちに見てもらい理解してほしいですね。大学の取り組みにさらなるエールを送ります。
・いろいろな本があることを知り、今後興味をもってみていきたい。点訳、さわる本が障害のある人にどのように受けとめられているのか、分かるすべもないが気になった。
・色々な工夫がこらされた絵本が出版されていることを知って、関心しました。
・ほとんど本屋で本を買っているので、今日のような本は目にすることがありません。友人の紹介できましたが、全体的に良かったです。
・絵本の世界でもバリアフリーが広がっていることに感激しました。みんな楽しいです。

(7) 来場者の反応(学生スタッフ記録から)
① DAISY に興味
・家族で来られた方、お子さんが弱視ということで、DAISY に関心を持たれ、城北

図書館の「声のライブラリー」について詳しく聞いてこられた。
・母親が弱視者という方が、DAISYに興味を持たれていました。

② 点字絵本への反応
・浜松盲学校(現視覚障害者特別支援学校)の生徒さんがお母さんと来られました。点字の図書が好きなようでした。展示してある図書の販売はしていないかと質問されました。
・視覚に障害のあるお母さん。ドラえもんのさわる絵本を手にとって、「ドラえもんはこんな形をしているのですね」と言われた。子どもと一緒にテレビでドラえもんを見る(聞く)ことはあったが、どのような形をしているのかはこれまで知る機会がなかったという。この方は、日本点字図書館から点字図書や録音図書を借りておられるが、市販されている点字絵本のことはご存じなかった。

③ その他
・養護学校の先生、特に重い障害のある子どもへの訪問教育を担当しておられる方が来られました。布の絵本などの存在をご存じなかったということで、メモをとりながら１点１点みておられた。

3-3．絵本展を開催して

展示会でバリアフリー絵本、特に手話絵本やDAISYの存在を知ってもらうことができることは成果であろう。来場者の中には、障害のある方やその家族の方もいたが、必要としている人たちのところにこういった資料の存在がまだ十分知られていないことを感じた。

来場者とのコミュニケーションをとることができたのも成果といえる。学生スタッフが展示内容を説明することでコミュニケーションがはじまり、来場者に教えられたことも多かったようである。

この展示会が即大学図書館の利用拡大につながることはないかもしれない。ただ本学図書館がユニバーサルデザイン、バリアフリー絵本関連資料を所蔵していることを知ってもらえたことにより、今後必要が生じた時に、利用してもらえる可能性があると考えている。

4．まとめと展望

以上、本研究における検討点への解決案として、次の２つの方法が見出された。

まず、蔵書スペースの横溢化の問題に関しては、現在の技術を応用して書籍を管理する書棚を作成することにより、図書の分散配置の形態が考えられ、これによって現在の図書館の蔵書の負担を減らす可能性が考えられること。

また、バリアフリー関連の書籍については、社会的な認知度が低いが、実際の展示からそれらについての関心は高く、また触覚や嗅覚までも利用した、さまざまな方法での情報伝達のあり方については今後さらなる可能性が考えられ、大学図書館の特色付けを考える上で１つの有益なヒントとなること。

今後は、さらに他大学の事例や新しい技術の動向についての情報を収集しながら、本学ならではの図書館と学習環境のあり方について検討を行う予定である。

※　本研究活動は、平成19年度学長特別研究「IT技術を利用した新しい図書館の研究」よりの研究費を得て実施されたものである。

ⅰ木戸浦豊和ほか「展示会からはじまる大学図書館の新たな可能性」『大学図書館研究』80(2007.8) p.33-42など。